

# 他者理解を促すためのブックガイド

小川 公代  
上智大学外国語学部  
英語学科 教授

ケアを行うに当たって、自身とは異なる内面世界を生きる患者＝他者を少しでも理解しようと努めることは、大切なアティチュードです。とは言い、他者を理解することも、そうした姿勢を維持することも、なかなか難しいのが実際のところ。本連載で紹介する書籍や物語作品は、他者理解に臨む上でのヒントを与えてくれるはず。気になる作品を見つけたら、ぜひ手に取ってみてください。

## 第5回 音のないことばの世界『育児まんが日記 せかいはことば』

他者を理解するには「ことば」が必要だ。ただ、マジョリティである聴者の世界では、どうしても「音のあることば」が支配的となる。しかし、ろう者である齋藤陽道さんの『育児まんが日記 せかいはことば』<sup>1)</sup>を読むと、「音のないことば」の世界は親密さや豊かさで満ちていることがわかる。かつて齋藤さんは「聞こえる人のほうがえらい」という強迫観念のようなものにとらわれていたという。しかし、聴者が主に「耳を使って生きて」いるように、ろう者は主に「目を使って生きて」いる。その「ことば」の多様さに目を眩らされた。齋藤さんは子どもとも「耳にあてて『うんうん』と音声で答え」る「電話ごっこ」をするのではなく、スマホで「テレビ電話ごっこ」をするなど、ろう者としての身体感覚に近い表現をする。相手に「だいすき」という気持ちを伝える「シッチャカメッチャカ『大』ダンス」というパワフルな身体表現もまた「ことば」なのだ。「聞こえる人がえらい」という偏見を乗り越えさせる、身体的な「ことば」が、齋藤さんの生き生きとした絵と共に表現されている。

聞こえない親を持つ聞こえる子どもを「コーダ」というが、齋藤さんの息子のいつきくんがそうなのである。親に「音を教える」時、例えば弟の赤ん坊が「ないてるよ」と伝える時、その応答としてつい「ありがとう」と言ってしまうようになる。しかし齋藤さんはそれを必死にこらえる。なぜなら、子どもが音を伝えることで感謝されると、「どんどん音のお手伝いをするよう」になるからだ。自分たちが子どもの「耳に寄りかからない」ための工夫なのだという。妻のまなみさんが車の運転をする時も、チャイルドシートに収まっている弟が泣いているかいつきくんを探るのではなく、「どんな『顔』してる？」と赤子の様子を教えてもらっている。聴者である子どもに音の「通訳」を期待しないようにする実践こそ、子どもが生きていくだけで無条件で「うれしい」という歓喜につながる。

漫画で驚くほど生彩を放つ家族たちの表情をとらえた齋藤さんの絵は、長年「相手の顔をじっと見つめ」る習慣によって培われたものだろう。この慈しみが齋藤家の相互依存の原動力になっている気がする。子どもが誕生したことで、齋藤さんはかつて「ただの振動」と思い込んでいた音楽を再発見する。その様子を記録したドキュメンタリー映画『うたのはじまり』には、人間の生の根源にある、名状しがたい何かが発見される瞬間が表現されている。例えば、画家の小林紗織さんが生活音や歌を絵字幕にして映し出しているが、それらの絵字幕の「生々しさ」に触れた齋藤さんは、根源的なものは「容易にことばにならない」と語っている。「感動」の手話、両手のつまんだ五指が頬の辺りから「じっくりじわじわと、あがっていく」のだそうだ。頭で考えるのではなく、まさに「心から脳へと伝わる過程」が表現されている。自分とは異なる身体を持つ他者を理解するための「ことば」の奥深さを知る。

映画『コーダ あいのうた』は、コーダである高校生ルビーの視点から描かれている。ルビーが家業の漁業を毎日欠かさず手伝っているのは、家族の中でたった1人の聴者である彼女が、ろう者である両親や兄にとって、労働者としても、「通訳」としても、戦力になるからだ。ルビーは合唱クラブに入ったことで歌の才能が開花し、クラブ顧問の先生に名門音楽大学の受験を強く勧められるのだが、家業との両立が難しくなり、葛藤する。

まさにこれとは正反対なのが齋藤さんたちが実践する子育てである。聞こえる人の常識を打破したところに、人間らしい「ことば」を発見するのである。

### 参考文献

1) 齋藤陽道. 育児まんが日記 せかいはことば. ナナログ社; 2022.



# 視点 心のケアと「わかること」——雨の日の心理学



東畑 開人 白金高輪カウンセリングルーム / 臨床心理士

かつて小さな女子大で心理学を教えていた。1年目の授業は大惨敗。教科書通りにフロイトだのロジャースだのバプロフだのと話していたら、学生たちが次々と眠りに落ちていったのだ。言葉がブラックホールに吸い込まれていくみたいで、孤独だった。教師はつらいよ。

でも、わかる気もした。心理士になるとは限らず、養護教諭や看護師、あるいは一般就職も含めてさまざまな進路を考えている1年生たちに対して、「なぜ心理学を学ぶ必要があるのか」「心理学はなんの役に立つのか」をうまく伝えられていなかったからだ。それなのに、硬い知識だけを浴びせられても、そりゃつまらない。私だって寝てしまう。

だから、2年目の最初の授業は次のような話から始めた。それは水曜日の眠たい一限で、確か大雨が降っていた朝だった。

「おはようございます。ひどい雨ですね。僕は靴も靴下もビチャビチャで、最悪です。皆さんもそうじゃないですか。こういう朝、家族や友人が駅まで車で送ってくれると助かりますよね。土砂降りでも、車の中は空調が効いていて快適だから、乾いた靴下で登校できます。

いや、雑談してるわけじゃないんです。実はこれ、心の話です。なぜだかわかりますか？ この時ケアされたのは、濡れなかった靴下だけじゃなくて、濡れなくなかった心でもあるからです。

ケアとは『傷つけないこと』を意味しています。ですから、お腹が減っていれば、温かいご飯に心はケアされます。貯金がない時に、お金が入ると安心します。雨の日は車や傘が心をケアしてくれる。ほら、車で送ってもらっている時、運転してくれている人をいつもよりちょっと身近に感じませんか？ 心と心は物や行動を介して触れ合います。

当たり前のように聞こえるかもしれませんがね。その通り。心のケアは特別なものではなく、皆さんの生活に生きているありふれたものです。だとすると、この授業で習うような心理学なんて必要ないのかもしれませんが。雨が降り始めたら、傘を指し出す。それは自然な営みで、わざわざ学問を持ち出す必要なんてない気がします。

でもね、ケアには時々ものすごく難しくなってしまうことがあるのがミソです。そう、大雨が外ではなく、心の中で降っている時がある。

例えば、学校に行こうとするとお腹

が痛くなってしまふ少年がいます。病院に行っても原因不明で、きっと心の問題だろうと言われる。でも、本人にも家族にも教師にも、なぜそうなっているのかわかりません。外の雨と違って、心の雨は目に見えません。だから、どうすればいいかわからず、周りは途方に暮れてしまいます。

心理学が役に立つのはこういう時です。不安や恐怖、孤立や不信についての心理学が、少年の心にどんな雨が降っているのかを少しだけ見えるようにしてくれます。彼が何に傷つき、何を求めているのかわかると、周囲の人は適切なタイミングで適切な傘を差し出すことができるようになります。

わかること。これこそが心のケアの基礎であり、奥義です。心の中で何が起きているのかわかれば、何がケアになるかは自然と導き出されます。そして、わかってもらえたことそのものが、心を孤独から遠ざけてくれます。

こういうことです。僕らが今日から心理学の勉強をするのは、『わからない』心を前にした時に、少しでも『わかる』ためです。自然にケアができなくなった時、それでもケアをし続けるために必要になるのが、雨の日の心理学です。

どうだろう？ 一緒に勉強してみませんか？

見渡すと、外の雨は弱まり、眠たそうにしていた女子学生たちが少し関心を持ってくれたのがわかる。私の中に降っていた心の雨も弱まっている。教師とは、学生に寝ないで話を聞いてほしいと願う、切ない職業なのである。

今はその女子大を辞めて、町の心理士として働いている。でも、臨床の仕事と同時に心理学を教える仕事は細々と続けている。学生ではなく、心理士や看護師、医師や教師などの対人援助職に対して、そして家族や同僚など身近な人をケアする人たちに対して、つまり「わからない」心の傍らで戸惑う人たちに対して、雨の日の授業を続けている。

対人援助に関心のある専門職・市民向けのオンライン講義「心のケア入門」が2023年5月に開講します。詳細は右記QRコードからご覧いただけます。



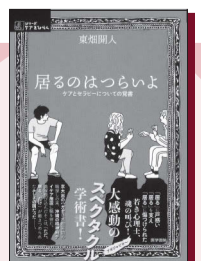
●とうはた・かいと氏/2010年京大大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。精神科クリニック勤務、十文字学園女子大准教授等を経て、白金高輪カウンセリングルーム主宰。慶大大学院社会学研究科訪問准教授。臨床心理士、公認心理師。『居るのはつらいよ——ケアとセラピーについての覚書』(医学書院)など著書多数。Twitter ID: @ktowhata

## 「ただ居るだけ」vs.「それでいいのか」

### <シリーズ ケアをひらく> 居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書

京大出の心理学ハカセは悪戦苦闘の職探しの末、ようやく沖縄の精神科デイケア施設に職を得た。「セラピーをするんだ！」と勇躍飛び込んだそこは、あらゆる価値が反転するふしぎの国だった——。ケアとセラピーの価値について究極まで考え抜かれた本書は、同時に、人生の一時期を共に生きたメンバーさんやスタッフたちとの熱き友情物語でもあります。一言でいえば、涙あり笑いあり出血(!)ありの、大感動スペクタクル学術書!

東畑開人



## 手と目で「見る」とはどういうことか。

### <シリーズ ケアをひらく> 異なり記念日

「聞こえる家族」に生まれたらう者の僕と、「ろう家族」に生まれたらう者の妻。ふたりの間に、聞こえる子どもがやってきた! 身体と文化を異にする3人は、言葉の前にまなざしを交わし、慰めの前に手触りを送る。見る、聞く、話す、触れることの〈歓び〉とともに。ケアが発生する現場からの感動的な実況報告。

齋藤陽道

